

# 日本メキシコ学院における日本コース・メキシココースの交流学習の実践

前日本メキシコ学院日本コース 教諭

愛媛県松山市立浮穴小学校 教諭 東山 知沙

キーワード：交流学習、言語力、国際理解

## 1. はじめに

日本メキシコ学院は、日本コース（在外教育施設）とメキシココースが同じ敷地内で学ぶという大きな特徴をもつ学校である。その特徴を生かし、運動会をはじめとする学院交流や死者の日などの暦行事での学部交流、書写体験などの学年交流など幅広く交流を進めている。本学院の「建学の精神」にも掲げられている「相互理解」「教育文化の交流」を図るとともに、児童生徒の「豊かな国際性」を伸ばすために、継続して取り組んでいる両コースの交流の研究は本学院の柱となっている。その研究の成果をここで紹介したい。

## 2. 交流学習の目的

本学院は2017年で、開院40周年を迎える。学院設立にあたっては、両国の親睦と国際人の育成という強い願いが込められている。児童数や施設設備さらには社会の変化がある中で、いろいろと模索しながらも、日本とメキシコの架橋となる児童生徒の育成を目指し、これまで継続した研究と実践を行ってきた。

2016年度の日本コースの研究主題は、「児童生徒の経験や学びがにつながる交流の在り方」とし、これまでの交流の経験に加えて、日本やメキシコでの生活経験、学習経験をつなげる場として交流を考えていくようにした。

また研究副題を「言語力を高め、自分の思いを正しく伝えられる子の育成を目指して」とし、各教科領域で身につけた言語力を交流に生かせるようにした。日本語・スペイン語・英語の3言語だけでなく、身振り手振りや言語カードなど自分の気持ちを表現する手段も言語活動として各教科領域で学ぶことで、スペイン語が話せないからと消極的になってしまうのではなく、自分の得意な言語でとにかく関係をもってみよう、自分の思いを伝えてみようとする思いを育てたいと考えた。



【両コース合同運動会 小学部1・2年生玉入れ競技】

## 3. 交流学習の実践

### (1) 交流年間計画

日本コースでは、これまでの研究をもとに交流年間指導計画を作成し、各学年で計画的に交流を進めてきた。5月には交流学習に対する事前意識調査を、12月には交流学習を通しての事後意識調査を行った。その結果から、それぞれの発達段階と経験に応じたねらいをもった交流を進めたことで、どの学年の交流でも、達成感や充実感を感じる児童生徒が多く見られた。指導者も、研究の成果としての内容であるので、安心して授業を計画することができた。これまでの先生方が残してきた願いを受け取り、成果を生かすことは、つないでいく研究にとってとても大切なことである。

### (2) 国際性とコミュニケーション力

1回目よりも2回目の交流授業の方が、去年よりも今年の交流の方が、楽しくできたと感じる児童生徒がほとんどであった。それは、交流の経験が、自分・相手・コミュニケーションの学びとなり、それがつながっているからである。回数や学年を重ねるにつれて、児童生徒の交流の経験は増える。自分ができること、がんばれるこ

とも見えてくる。言語に関しても同様である。あいさつや自分の名前などスペイン語クラスで学んだことで一生懸命伝えようとする子、日本語の説明をスペイン語に訳して流暢に伝える子、指導者の言葉をその場で通訳できる子、英語で意思疎通ができる子など、これまでの経験や学びは個々である。自分ができることを生かせる場として交流を位置づけることで、新しい活躍が見られる児童生徒が見られた。

一つひとつの経験が次のコミュニケーションの力を引き出すことにつながると考える。運動会だけでなく、文化祭でも両コースが共に発表する学年が増えた。「次はこうしたい」という学びの広がりと言えるだろう。国際的な感覚、豊かなコミュニケーション力は互いの関わりを積み上げた姿から見えてくると考える。

### (3) 学びのある交流

小学部は「親しみのある交流」をねらいとし、低学年では道具や行事と一緒に活動し、高学年では共に活動する中で新しい学びや達成感を味わう経験を重ねるようにした。イベント的な大きな交流も、授業としての交流も、教科単元の学習を大切にしながらも、まずは両コースが共に学び合うことを楽しむ交流を考えた。どの学年の交流でも、両コース児童からは笑顔が見られた。初対面や言葉の不安はあるけれど、楽しい経験は、次への意欲につながる。自分たちとは違う文化があり、違う考え方をもっていることを体験的に知ること、それを認め、世界を広げていくきっかけとなる。中学部は「教科の特性を生かした交流」をねらいとし、教科の特性を生かし、交流を自分の価値観を広げる場と考えた。英語科は、合同英語として年間を通して両コース英語科の教員によるコース別授業を行った。共通言語である英語科の特性を生かし、両コースのスキルアップを図ると同じ目標を掲げ、充実した交流ができた。英語で意思疎通ができることに気付いたことで、その他の交流でも、どうにか自分で気持ちを伝えようとする姿が見られるようになった。中学生としての異文化理解が進み、許容・寛容・尊重について考える機会となるとともに、語学学習に対する意欲向上にもつながっている。

### (4) 両コース教職員のつながり

交流学習を進めていく中で、両コース教職員のつながりが薄いことが課題としてあった。そこで、2017年6月、12月そして、2018年2月には、両コースの合同研修会を実施した。意見交換会や、両コース提案研修などを行い、互いを知る大きな機会となった。顔見知りが増え、学院内での声の掛け合いなどが活発になったことは、交流や行事をスムーズに進めることができるだけでなく、両コースの壁を取り払う児童生徒への手本となっていると思う。国際理解の基本は、違いを知り、受け入れることであることを指導者側が、肌で感じ、理解することが大切であると実感した。



【両コース合同研修会にて両コース教職員集合】

## 4. まとめ

私は、在外教育施設派遣者は、その学校の大切な歴史をつなげるという大きな役割があると考えている。設立にあたっては、メキシコに住む日本に関わりの深い人々の強い願いがある。そして、今と未来をつなげる大きな希望がある。今を見るだけでは、過去と未来をつなげることはできない。派遣者として、自分の力を生かすためには、設立の願いを知ることがとても重要だと思う。本学院は設立以来40年間大切にしてきた、両コースの交流という大きな柱をもっている。日本コース・メキシココースが共に学ぶ本学院の児童生徒にとって交流が楽しみであり、誇りであってほしい。

交流の研究を通して、国際理解とは、言語や文化の「理解」ではないことに気付いた。自分とは違う文化があることを「知る」ことが国際理解なのではないか。スペイン語を話すのは大変だし、メキシコ料理を作れるようになるのは難しいことかもしれない。けれど、メキシコの人々は話好きであることや、日本の主食の米はデザートになることを知ることは難しいことではない。違いを知り、それを話題にすることで身振り手振りを含めてコミュニケーションが生まれる。

日本は、多くの国の人と関わる機会が身近ではない。しかし、身の回りのものは、多くの国のもので支えられている。国際理解教育が特別なものではなく、自分とは違う文化が身の回りであることを知ることからスタートできればいいと考える。もっと身近な「世界」であってほしい。